

ソローの「実験」を継承する人々

萩川信弘*・立花顕一郎**

The inheritors of Thoreau's *Experiment*

HARAIKAWA Nobuhiro and TACHIBANA Ken-ichiro

はじめに

「農民は「自然」を盗賊の立場から知っているにすぎない」(ソロー [1995a] P.295) という大胆な警句は同時代のマルクスと通底しつつ¹⁾、農業由来の深刻な環境問題を予感させるものである。とはいえ、農業変質の起動力(driving force)を資本主義経済というシステムに求めたマルクスと異なり、ソローにおいては「思考と感情の舞台」(ソロー [1995a] P.243)である「私」(ソロー [1995a] P.10)という観察主体の「実験²⁾」を通してその本質が語られている。他方、そのソローの「実験」を評価しようとする私たちは、自然環境が経済的価値として評価される社会で暮らし、人工環境や^{サイバー}電脳空間の下で醸成される価値観から生まれる需要が環境財³⁾によって充足される^{マーケット}市場の動態をリアル

* 東北文化学園大学総合政策学部教授

** 東北文化学園大学総合政策学部准教授

1) 土地を「自覚的合理的に取り扱うことに代わって、地力の搾取や乱費が現れ」(マルクス [1968] P.1,040)、工業的に経営される大農業は「より多く直接的に土地の自然力を荒廃させ破滅させる」(マルクス [1968] P.1,042)。

2) 当該実験は市場経済との関係<依存・自立>を強く意識するものであった。

3) 後述のように、本稿では環境財の一つとして市民農園を取り上げている。

タイムで体感できる。ソローが直面していた実験の「場」としての19世紀米国東部とは明らかに異なる現代の^{グローバル}世界を生きる存在である。

本稿はかかる認識の下でソローが示そうとした「實在」(ソロー [1995a] PP.171-172)に迫りたい。それは私たちの内部にあって未来を創造する起動力に転化しうるものであり、その力(force)は現代の世界に継承されていると考えられる⁴⁾。なぜなら、いかに急速に時代が変化しているように見えても、私たちが自然の恩恵を素材とし、想像力や技術力を駆使して新たな事物を創造することを手段として自らを再生産していく存在であることに変わりはないはずであるから。

1 ソローの実験の背景と目的

1.1 実験の概要および前提

ソローは建坪13.5m²(幅3m, 奥行4.5m, 柱の高さ2.4m)の木造モルタル(暖炉付き)小屋を建てた。建設費は「年三十ドル」(ソロー [1995a] PP.90-93)の学生寮より安く⁵⁾、荒地を開墾した農地で栽培したインゲンマメやジャガイモを23.44ドルで売り、8,715ドルの利益を得た⁶⁾(ソロー [1995a] PP.99-101)。以上の点から明らかなように、彼の質素儉約生活を支えたものは自らの「取り柄」(ソロー [1995a] P.125)や「自発的貧困」(ソロー [1995a] P.29)という有利な基盤とともに⁷⁾、その前提となる安価な家と無償の土地であったと考えられる⁸⁾。

1.2 実験の準備期間——森に行くまでの生活史

大学を卒業後、教師の辞職から兄ジョンの病状悪化による閉校で一段落する学校運営⁹⁾にいたるソローの波乱に満ちた職業遍歴¹⁰⁾(ハーディング [2005]

4) 出版後160年の歳月が『森の生活』を古典として熟成させたと考えられる。

5) 但し、その金額には、労働の機会費用(約1^{ドル}/日)、建築技術の習得費用(機会費用換算)および土地購入費(8.8^{ドル}/エーカー)等は一切含まれていない。

6) インゲンマメ収量324kgの約78%が6.7^{ドル}/kgの価格で、またジャガイモ収量486kgの約78%が0.34^{ドル}/kgの価格で販売された⁶⁾(ソロー [1995a] P.290)。

7) 当時、多くの農民が債務返済に追われていたとされている(ソロー [1995a] P.61)。

8) “squatter”は「不法占拠者、借地人」(ソロー [1995a] P.92,P.100)と訳されているが、「合法的に新開拓地に定住する人」(研究社,2388)の意味もある。

表1 森で暮らすまでの20代のソローの生活史

時 期	事 項
1837年夏	C. S. ホイラーとフリンツ湖畔で6週間過ごす。
1837年	地元の学校に就職したが2週間で辞職する。
1837年～	実家の工場で鉛筆の品質向上等に従事。
1838年6月	兄ジョンとともにコンコード学院を開校(～1841年4月)
1839年8月31日	コンコード川とメリマック川の舟旅(～9月12日)
1841年	自給生活をするための土地を探し求める。
1842年1月	兄ジョンが破傷風で亡くなり、ソロー自身も心身症を患う。
1843年5月～12月	ニューヨーク市近郊のスタテン島で家庭教師に従事し、その間にドイツ留学中の親友C. S. ホイラーの死を知る(1943年6月)
1843年12月～	父の鉛筆工場で製造法と製品の改良に従事。芯の硬度規格を設定し、用途別鉛筆の販売を開始。
1844年9月	父が自宅の建築資材を購入。父と共に自宅を建設する。
1844年秋	R. W. エマソンがウォールデン湖畔の土地を購入。
1845年3月末	棟木用の木材(松)を伐採し始める。
1845年4月中旬	小屋(約13.5m ²)の骨組みが完了。
1845年5月初旬	小屋の棟上げ(エマソン、オルcott、ホズマー親子ら)
1845年5月	小屋近くの藪を開墾し始める(2.5エーカー)
1845年6月	インゲンマメを播種(推定約5万粒)
1845年7月4日	小屋に住み始める(～1847年9月6日)

注：ハーディング(65, 73-75, 78-79, 106-108, 124-131, 180-182, 196-199, 215-229, 233-235, 258-260, 266-269)に依拠して作成。

PP.73-131, PP.123-124)はエマソン宅で暮らしたその後の2年余りを含め「実験」の準備期間として位置づくものであると考えられる¹¹⁾(ハーディング[2005] PP.187-191)。さらに、1842年に兄ジョン、1843年には親友ホイラーの死に

9) 森林への散歩、ボート漕ぎ、農作業、測量実習など「活動しながら学ぶ」(ハーディング[2005] P.116)科目を組み込んだ先進的な教育方法が実践されていた。

10) その期間に開催されたパーティーで彼の作るメロンの味が評判になったという(ハーディング[2005] P.126)挿話は、「菜園づくりなら、これまでずっとやってきた」(ソロー[1995a] P.147)と彼自身が述べる豊富な農業経験の一端を示すものである。

11) 庭仕事の代償として食事付の居住と蔵書を利用する恩恵が供与され、ソローは東洋的価値観に心を動かされることになる(ハーディング[2005] PP.187-191)。

直面した(ハーディング [2005] PP.196-199, PP.227-228). 身近な者との死別の経験は、居住地跡の碑に刻まれている「死ぬときになって、自分が生きてはいなかったことを発見するようなはめにおちいりたくなかった」(ソロー [1995a] P.162)という彼の真摯な決心と無縁とはいえないだろう。1843年末に故郷に戻った彼は家業の鉛筆製造に再び取り組み始める¹²⁾(ハーディング [2005] PP.233-234, P.258). そして、1844年秋には父親と自宅の建設作業に汗を流しながら森で暮らす計画を固めていく(ハーディング [2005] P.259).

1.3 「盗賊」に対するソローの批判とベリーによる継承

「農民は「自然」を盗賊の立場から知っているにすぎない」(ソロー [1995a] P.330)という警句は「湖の水まで枯渇させようとした」(ソロー [1995b] P.46)拝金主義者のフリント¹³⁾に対する義憤であるばかりでなく、「かつては聖なる技術であった」(ソロー [1995a] P.294)農耕を墮落させている同時代人たちへの批判でもあると考えられる¹⁴⁾. とはいえ、農業という経済活動によって生計を維持しようとする限り、ソロー自身もその現実から逃れることはできない。

その矛盾を「自給」によって解決しようと考えた19世紀のソローに対して、すでに農民が「統計上とるに足らないマイノリティでしかない」(ベリー [2008] P.5)存在になっていた20世紀の米国において農的生活者(agrarian)として生きながら、「工業的思想を修正するための対抗力となりえる思想」(ベリー, 30)を模索していく中で「大経済(Great Economy)」¹⁵⁾(ベリー [2008] P.175)という概念を提起した W. ベリーはその矛先を都市住民に向けている¹⁶⁾. つまり、第二次世界大戦後、「身体から分離された心、あるいは欲望から生じ

12) ソロー製鉛筆は後に(1847,1849年)業界団体から表彰されるほど高い評価を受けることになる(ハーディング [2005] PP.233-235, ベトロフスキー [1993] PP.132-138).

13) フリントはソローが大学4年の夏休みに親友ホイーラーと過ごしたフリンツ湖(=サンディ湖)の所有者である(ハーディング [2005] P.65, ソロー [1995b] PP.45-46).

14) 「不遜なまでにいそいで、不注意に農業を営んでいる」われわれは(生命の維持に不可欠な光と熱の恩恵を与えている)太陽が「耕地や平原や森を分けへだてなく見おろしていることを、とかく忘れがちである」(ソロー [1995a] PP.294-295).

15) 「空の鳥と野の花は大経済のなかで自然(nature)によって生きている」のに対して人間は、「全面的に大経済に依存しているけれども、部分的に技術(artifice)によってそのなかに生きなければならない」にもかかわらず、「あたかもそのなかで生きているのではないかのようにふるまうことを選べる」(ベリー [2008] P.177).

16) 「都市生活の有害な影響の一つは、身体をもつ存在である自分自身についての実感的感覚を失うことである」(ベリー [2008] P.10)

る幻想」(ペリー [2008] P.10)に突き動かされて都市への移住を選択した都市住民が、「受動的で、無批判で、依存度の強い、ただの消費者」(ペリー [2008] P.205)になるのに従って、「生命を育む土壌構造を殺し、地下水系を涸渇させ汚染する」(ペリー [2008] P.6)アグリビジネスのやり方や「食物と農業との繋がりを不明瞭にしておきたい」(ペリー [2008] P.208)食品産業の経済活動が発展し、「未来に対して返済できない負債を背負い込む」(ペリー [2008] P.178)という愚挙を「我々」が犯してきたとペリーは考える¹⁷⁾。そのうえで、状況を変革するためには都市住民が「人間と大地の間の最も具体的で身近なつながり」である食料生産に参加し、「農民たちをもっと直接的に知り、ともに活動する」ことによって「医療、経済、政治、宗教など」(ペリー [2008] P.21)を農的生活者の観点から理解できるようになる必要があるとしている¹⁸⁾。

1.4 実験の成果

鉛筆工場の労働が余暇の削減、睡眠障害¹⁹⁾、黒鉛粒子による健康被害²⁰⁾などをもたらしていたとすれば(ハーディング [2005] P.79, P.233, PP.258-259), その「実験」は自らの奴隷監督化(ソロー [1995a] P.16)を予防し、「生活を質的に高めること」(ソロー [1995a] PP.162)という手段によって「方法においてはきわめて自然」で「比類のない成功」(ソロー [1995a] PP.215-217)を収めるという「商業」に対する肯定的評価(ソロー [1995a] PP.215-217)につながっているのではないだろうか。

森で暮らし始めた年の夏の間、彼は本も読まずに小屋作りや畑仕事に専念し、時にはそれも放擲して夢想にふけったとされている(ソロー [1995a] PP.201-202)。一見無駄と思えるその時間が、かつてエマソンの蔵書から知り

17) 「現在は「利用」と呼んでいるが未来の人は「泥棒」と呼ぶであろう行為によって、我々は未来を減少させているのである」(ペリー [2008] P.178)

18) ペリーは、工場経営主ではない人々が工業主義的思考様式を理解しえたように、農業者でなくても「農的生活者の基本原則」(ペリー [2008] P.20)を理解することは可能であり、すべての人が農民になる必要はない(ペリー [2008] P.40)としている。

19) コンコードに戻ったソローは「仕事にあまりに熱中したため、他に何もできず、夢のなかでさえも新しい器械のところで仕事をしていた」(ハーディング [2005] P.233)とエマソンに不平を漏らしたとされている。

20) ハーディングは、大学卒業後に実家の鉛筆工場で働いていたソローについて、「すでに悪化しつつあったソローの肺に、細かい黒鉛の塵が及ぼした影響は容易に想像できる」(ハーディング [2005] P.79)としている。

えた「東洋人の言う瞑想とか、無為という言葉」(ソロー [1995a] P.202)の意味するところを彼に悟らせ、みずみずしい新鮮さを失わずに日々の生活を楽しむ(ソロー [1995a] P.204)ことを可能にするものであったと考えられる。

2 「食」の自給要件

作物を育てて自給するだけなら、「二、三ロッド²¹⁾の土地を耕すだけで足りる」(ソロー [1995a] P.102)とソローは実証抜きに結論づけている²²⁾。しかし、臨時の支出に備えるという目的で彼がインゲンマメを播種した面積はその百倍以上(2.5エーカー=400平方ロッド)であり、その翌年には耕作面積を「約三分の一」エーカーまで減らしているとはいえ、「二年間の経験」(ソロー [1995a] PP.101-102)から得られたとされる結論の導出方法は明示的であるとはいえない²³⁾。

また、長年にわたって菜園づくりを続けてきた(ソロー [1995a] P.147)はずのソローは、実験に取り組む前から自給に必要な畑の面積を知っていたと考えられる。では、なぜ彼には2.5エーカーの面積が必要だったのか。それは農民たちとの「苦行」(ソロー [1995a] P.11)の共有を意図するものではなかったのだろうか。すなわち、生きるために必要な豊富な技術や高い能力を持ちながら「生計の問題を、問題自体よりもずっと複雑な公式を使って解こうとしている」(ソロー [1995a] P.63)農民に対して逆説的な打開策を示すために、先進技術に逆行する費用をかけない手作業中心の栽培に取り組み、その結果として、「どんな農民よりもよい成績をあげることができた」(ソロー [1995a] P.101)と敢えて挑発的な宣言を行ったのではないだろうか。すなわち、当時、普及しつつあった近代的な農具や農法に頼らず、鋤(hoe)のみを使った手作業による中耕・除草に徹したソローは、1本の畝の長さを平均5ロッド(約75m)とし、マメ畑全体の畝数を130本余りとした場合、どの程度の作業量(時

21) ソローは長さを表す単位の“rod (s)”と面積を表す単位の“square rod (s)”をともに“rod (s)”と表記し、翻訳者もそのまま訳しているが、正確には面積を表す単位については“square rod (s)”とし、「平方ロッド」と訳すべきであると考ええる。

22) 後述のように、その大きさ(a few rods)は市民農園の1区画の面積に近い。

23) 初年度の作付目的は自給ではない。また、次年度は自給中心と考えられるが、作付面積は約0.

33エーカー(約54平方ロッド)であった(ソロー [1995a] P.101)。

間)が必要になるかを算出し、その推定値に基づいて2.5エーカーという面積を割り出したと考えられるのではないだろうか²⁴⁾。

小屋の建設や農場経営の収支計算からウォールデン湖の実測にいたるまで、測量士らしく詳細な記録にこだわっているソローが自給に必要な面積に関する実証を回避している点は不思議である。耕作に必要な土地(約0.33エーカー)だけに限定した1846年は「さらにうまく行った」(ソロー [1995a] P.101)とされ、残されていたはずの1847年5～8月の作季にはふれずに²⁵⁾、「簡素な生活を送り、自分で育てた作物だけを食べ、食べる以上のものは育てず、育てたものをわずかばかりの高価で贅沢な品物と交換したりしなければ、わずか二、三ロッドの土地を耕すだけで足りる」(ソロー [1995a] P.102)と結論づけ²⁶⁾、「必要な食料を手に入れるには信じがたいほどわずかな労力で足りる」(ソロー [1995a] P.112)と述べているが²⁷⁾、その理由は単に「森の生活だけにあれ以上の時間を割くわけにはいかないと感じられた」(ソロー [1995a] P., 274)ということなのだろうか²⁸⁾。

結局、ソローの「実験」は、隣人たちの目を覚ます朝のオンドリのように、「元気よく誇らかに歌うこと」(ソロー [1995a] P.151)を目的とするものであり、湖畔の小屋で暮らした自らの経験に基づく考え方を地元の人々に話す²⁹⁾(ハーディング [2005] P.275)ことによって所期の目的は果たされたと考えられ

24) この点に関して、フェア・ヘーヴンで釣りをしていたソローが突然の雷雨に遭い、「一エーカーにつき十ドル」のために過酷な湿地開拓に従事しながら貧しい生活から抜け出す術を見出せずにいるアイルランド移民のジョン・フィールドの一家が暮らす小屋に逃げ込み、そこで見聞きした彼らの暮らしぶりについて、「悲しいかな、ジョン・フィールドは計算能力もなく生き、そのために失敗しているのである」(ソロー [1995b] P.68)と嘆く言葉は示唆的である。

25) この点をふまえると、ソローが森を離れる(したがって1847年の耕作をしない)意思を固めたのは1847年4月以前の時期であったと考えられる。

26) ソローは、「次の夏がすぎ、さらに次の夏も、次の夏もむなしくすぎていった。(中略)私が蒔いた種は(中略)どれも虫に食われ、あるいは生命力を失っていたので、ついに芽を出すことはなかった」(ソロー [1995a] P.292)と記している。

27) 同時に、「使い古した畑に肥料をやるよりも、ときどき新しい場所を畑に選んだ方が安あがりだ」(ソロー [1995a] P.102)と指摘されているが、それは狭小な土地を有効に活用するための計画的輪作を想起させるものである。

28) ソローは暖炉をストーヴに変えた理由について(燃料の薪や枯木を拾い集める)「森は私のものではなかったからだ」(ソロー [1995b] P.148)と説明している。

29) 1846年2月4日にコンコード文化協会でカーライルについての講演が行われたが、森の生活を最初に紹介したのは1847年2月10日の「私の経歴」(後の「経済」の章の一部)である(ハーディング [2005] PP.275-276)。その後、セーレム文化協会などでの講演が行われた(ハーディング [2005] P.349-357)。

る。しかし、それから長い歳月を経た現在、「一〇〇年の歳月をかけて工業化、グローバル化された食料供給システム」(コックラル=キング [2014] P.23) の破局から救出する方法としてソローの「実験」は世界中の人々によって継承されている(コックラル=キング [2014] P.16)。コンコードから遠く隔たった日本もその例外ではない。

3 時空を超えて継承されるソローの実験

3.1 わが国における市民農園の現状

「市民農園整備促進法」施行(1990年)以来、市民農園は増加傾向にあるが、とりわけ農家の直接指導が享受できる体験型農園は市民が農業を理解する契機になると同時に、農業経営の収益性や農家の意欲に好影響を与えていると考えられている(原 [2009] PP.43-51, 八木 [2008] PP.109-118)。また、1区画30㎡(1.2平方ロッド)からの平均的な収穫は市場価格換算で年間「八万円」(大江 [2008] P.181)にもなり、「親子揃って共同で作業できる」(瀧井 [2007] P.20) 貴重な場でもあるとされている。

2013年現在、4,092農園の総面積は1,363ha(農林水産省農村振興局)であり、利用者数は少なくとも10万人を越え³⁰⁾、^{注3)}、神奈川県などを中心に農家との協力関係も定着しつつある³¹⁾。1区画当たりの面積、付帯施設や管理者等の有無などの点において多様性が示されるものの、農園数が比較的多い3都県の事例(表2)によれば、1区画当たりの平均面積は東京が20.85㎡(約0.8平方ロッド)、神奈川県が65.23㎡(約2.6平方ロッド)、長野県が101.40㎡(約4平方ロッド)などと都市化進展度または土地市場の影響を受けながら、かつてソローが結論づけた「二、三ロッド」に近い面積の分布となっている。

表2 首都圏(3都県)の市民農園設置状況について

項目／都県名	東京都	神奈川県	長野県
農園数	387	316	171
総区画数	23,447	14,439	3,935
平均面積(㎡/区)	20.85	65.23	101.40
平均面積(平方ロッド/区)	0.83*	2.6*	4.1*
料金(円)	9,845	7,096	6,012
単価(円/㎡)	472	109	59

注) 農林水産省資料(2013年現在)に基づいて作成し、1平方ロッドを25㎡として換算した。

3.2 共通媒体としての農的生活

鉛筆製造工場を営む父親の家で社交的な母親の世話を受けながら、高学歴の非正規雇用者であるソローが農民に提示した方法がウォールデン湖畔での生活の「実験」である。彼は農場で働く農民たちを「土地の奴隷」(ソロー [1995a] P.101) と揶揄しているが、彼らは家計改善のために鉛筆工場で働く彼自身の姿に重なるものではなかったのだろうか。自給のための小さな畑ではなく、敢えて自らが開墾した大きな畑で農業に従事することによって、彼自身は「盗賊」と「哲学者³²⁾」(ソロー [1995a] P.30) との狭間を彷徨っていたのかもしれない。

市民農園で展開されている農的生活の中から時代に制約された常識を超える未来志向のライフスタイルが生み出せる可能性は誰にも否定できないだろう。19世紀米国でソローが試みたように、社会状況を打破しうる力は人類の歴史を追体験しながら新たな歴史を創造しようとする過程の中で、未来に責任を持つことを願う「食と農」の参加者の手によって育まれていくと考えられる³³⁾。

4 結論

自らが食べるモノをつくる市民をソローの「実験」の継承者と考えた場合、「家の総仕上げとマメ畑の草取り」(ソロー [1995a] P.180) に忙殺された19世紀のソローとは異なり³⁴⁾、^{サイバー} 電脳空間という環境を含む^{グローバル} 21世紀の全球的世界を生きる現代のソローはラウベに泊まり菜園を耕しながら書物を読むことも可

30) 法律に基づかない農園を含む総農園数は2倍程度とされる(瀧井[2007] P.61)ことから、2013年3月時点の市民農園の設置総数は8,000農園程度と推測される。

31) 2013年度、講座修了生が組織する「はま農楽」には213人の会員登録がなされ83人が4,553日の援農に取り組んでいる。(2014年3月31日現在)

32) 哲学者になるとは「知恵の命ずるところに従って、簡素、独立、寛容、信頼の生活を送ることである」(ソロー [1995a] P.30)。

33) 「未来に起こるであろうことに対して一人一人が責任を負う」(内田[1971] P.46) ことを余儀なくされる参加型社会を生きる現代人は「対話を通しておたがいが変化し、新しい「われわれ」を作るしかない」(小熊[2012] P.397)と考えられる。

34) 「最初の夏は本を読まなかった」(ソロー [1995a] P.201)とあり、読書家のソローにとっても「家の総仕上げとマメ畑の草取りを同時にやらなければならなかった」(ソロー [1995a] P.180) 初年次の読書は困難であったと考えられる。

能だろう。

しかし、人間の言葉のみに没頭すれば自然の言葉を忘れてしまう(ソロー [1995a] P.201) 凡夫が自然の恩恵に相応しい「信頼と雅量」(ソロー [1995a] P.295) を身につけるには、自然そのものと同じように「思慮深く」(ソロー [1995a] P.175) 生き、「生活を質的に高める」(ソロー [1995a] P.162) ように努めながら「実在の世界」(ソロー [1995a] P.174) に身を浸すことが求められる³⁵⁾。それによって「予想もしなかったほどの成功を収めることができる」(ソロー [1995b] P.276) のであり、それは彼が自らの「実験」から得た最終的な結論であったと考えられる。

もちろん、ソローの「実験」のすべてが実証されたわけではない。しかし、その「実験」は現在に至るまで多様な形態で試みられている。その一つとして都市における「食物と農業との繋がり」(ベリー [2008] P.208) の回復活動を調査したコックラル＝キング (2014) は多くの都市で多様な市民 (citizen) が都市農民 (city farmer) に移行しつつあることを明らかにしている。現在の日本社会も同じ状況を共有しているといえる。それらの人々は「再帰性が増大した社会」(小熊[2012] P.397) において「われわれ」をつくる活動の担い手 (creator) であり、ソローの「実験」を継承する人々であると考えられる。

参考文献

- ベリー, W., 加藤貞通訳 [2008] 『ウェンデル・ベリーの環境思想』昭和堂。
 コックラル＝キング, J., 白井和宏訳 [2014] 『シティ・ファーマー』白水社。
 ハーディング, W., 山口晃訳 [2005] 『ヘンリー・ソローの日々』日本経済評論社。
 はま農楽 <http://www18.ocn.ne.jp>, 2014年7月11日閲覧。
 原修吉 [2009] 「農業体験型農園におけるナレッジマネジメント」『農業経営研究』, 46 (4), pp.43-51。
 神奈川県 <http://www.pref.kanagawa.jp>, 2014年8月8日閲覧。
 竹林滋編集代表 [2012] 『研究社 新英和大辞典』第6版第10刷, 研究社。
 マルクス, K., 大内兵衛・細川嘉六監訳 [1968] 『資本論 第3巻』大月書店。
 農林水産省 <http://www.maff.go.jp>, 2014年8月8日閲覧。
 小熊英二 [2012] 『社会を変えるには』講談社。
 大江正章 [2008] 『地域の力』岩波書店。

35) 「徳」を欠いた努力は、大地を「財産を手に入れるための手段」(ソロー (a) ,295) としか見なせない人間になる苦しみへと変質してしまうと考えられる。

- ペトロスキー ,H., 渡辺潤・岡田朋之訳 [1993]『鉛筆と人間』晶文社.
- 瀧井宏臣 [2007]『農のある人生』中央公論新社.
- ソロー ,H.D., 飯田実訳 [1995a]『森の生活(上)』岩波書店.
- ソロー ,H.D., 飯田実訳 [1995b]『森の生活(下)』岩波書店.
- ソロー ,H.D., 山口晃訳 [2010]『コンコード川とメリマック川の一週間』而立書房.
- 内田義彦 [1971]『社会認識の歩み』岩波書店.
- 八木洋憲 [2008]「都市農地における体験型農園の経営分析」『農業経営研究』, 45 (4), pp.109-118.